

アテトーゼ型脳性麻痺児が一人で座れた ～楽スタ環境下での知覚化のための荷重～

大阪府立岸和田支援学校

教諭 小浦 亜由里

【目的】

本校では平成 24 年度に全国で初めて重力軽減環境訓練システム（校内では楽々スタンディングの名称で愛称は楽スタ）を導入した。

これは四隅からゴムバンドで引っ張ることにより部分免荷と不安定ながら制御された環境をつくることで、脳障害に伴う未熟な姿勢運動を支援する装置である。（写真 1）楽スタでは、



（写真 1）楽スタ

一人で立位姿勢や座位姿勢を保持することができる。



（写真 2）



（写真 3）

（写真 2, 3）

しかし、アテトーゼを伴う脳性麻痺児は、筋緊張の変動が激しく、安定した介助座位をとることが困難で指導がうまくいかなかった。アテトーゼ型脳性麻痺児にも楽スタの効果を実感させたい、介助なしで姿勢保持し自己肯定感を持たせたいとの思いで「体幹を保持する」「安定した介助座位をとる」ことを目的として取組んだ。

【内容・方法】

これまでの楽スタ指導では、「低負荷・高頻度」をテーマにしており、「一人で立てた」「歩行が安定した」「一人で座位が取れた」など児童生徒の姿勢保持に変化がみられていた。指導上「荷重する」という発想は全くなく、姿勢を安定させるための工夫として骨盤ベルトを連結し、一体型として装着してみた。（写真 4）この方法で、一人で座ることができ当時としては画期的な出来事であった。（写真 5）



（写真 4）



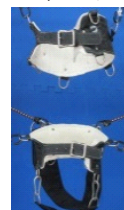
（写真 5）

しかし、ゴムの張力によっては、返って反る緊張を誘発してしまい、時によっては立ってしまうくらいの強い緊張が入

り課題を残したままだった。

新たな指導として、骨盤ベルト分離型を試みた。

（写真 6）腋下の骨盤ベルトには体幹の崩れを修正するため、2 本ずつ水平方向にゴムバンドを装着し下の骨盤ベルトは、足底及び座面を安定させるために骨盤から足関節の方向に下方向へ力が働くようにした。これによって骨盤が下方



（写真 6）



（写真 7）

へ押し下げられ座面全体が安定した。（写真 7）

結果的に「荷重する」ことで姿勢が安定した。

【事例】高 2 男子、脳性麻痺、アテトーゼを伴う。寝返り可能、筋緊張の変動が激しく、安定した介助座位をとることが困難である。骨盤ベルト分離型を使用し、内転抑制のため左大腿部にベルトを巻き足部を安定させた。その結果、自分では抑えきれない不随意運動を楽スタの中でコントロールできるようになり、喜びと安どの表情で取組めるようになった。この指導方法で注視できるようになり両手で前方のボール



（写真 8）

に触れたり（写真 8）、スイッチを活用した活動（写真 9、10）ができるようになった。そして、自立活動の指導では自ら楽スタを希望するようになった。



（写真 9）



（写真 10）

【結果・考察】

自分の動きを制御することが困難な脳性麻痺児が、不随意運動をコントロールし安定した姿勢を保つことはとても画期的なことであり、「一人で座れた」という成功体験が自己肯定感を生み意欲を掻き立てることを改めて知らせた。エビデンスにとらわれず、さらなる指導法に取り組んでいきたい。